

活動と資料

訪問看護事業所での臨地実習に対して 訪問看護師が抱く思いに関する文献検討



國丸 周平, 新井香奈子
滋賀県立大学人間看護学部

要旨 訪問看護事業所で行われる臨地実習に対して実習指導に携わる訪問看護師がどのような思いを抱いているか明らかにすることを目的に文献検討を行った。医中誌 Web, メディカルオンライン, CiNii Research を用いて「訪問看護師 and 実習」or「訪問看護ステーション and 実習」の検索語と検索式で検索した。選定基準に基づいて選定を行い、訪問看護事業所で行われる実習に対して訪問看護師が抱いている思いを分析した。結果、14 件の文献が研究対象となり、【実習を受け入れるうえでの困難】【実習の在り様に対する認識】【実習を通して学生に指導したいこと】【実習を通して自身が得られるもの】の 4 カテゴリを抽出した。訪問看護師は臨地実習に課題や改善点を感じつつも、学生に指導したい思いを持っており、指導したい内容は看護基礎教育に求められる学習内容と合致していた。訪問看護師が学生を訪問看護サービスに同行させ、療養者宅へ赴き、実習指導を行う機会が多いために、指導方法や療養者との調整、教員との連携に困難を感じている様子は、実習に対して訪問看護師が抱く思いの特徴的な部分であるといえる。

キーワード 訪問看護師, 臨地実習, 思い, 文献検討

I. 背景

看護基礎教育における第 5 次カリキュラムの改正に伴い、各教育機関では授業構成および内容の検討を通して、授業の充実化が図られている。

看護基礎教育における授業の中でも、臨地実習は看護職を育成するための重要な教育方法であり、効果的な臨地実習を実現するためには、大学と実習施設との連携と協働が必要となる (文部科学省, 2020)。現在、各教育機関で行われている在宅看護論の臨地実習は、主に訪問看護事業所で展開されている。そのため、訪問看護事業所で行われる臨地実習においても、大学と訪問看護事業所との連携を通して指導体制を構築し、学習環境を整備することが重要となる。臨地実習における指導体制について、具体的な指導方法の整備および指導内容の検討については、大学の実習担当教員と実習施設の実習指導担当の役割を担うスタッフで連携が図られる。訪問看護事業所で行われる臨地実習では、実習を受け入れている事業所内の 9 割の訪問看護師が実習指導に携わっている (東海林, 森鍵, 大竹, 細谷, 小林, 2016) 他、実習中は訪問看護師が学生を訪問看護サービスに同行させ、療養者宅へ訪問することが基本となっている。そのため、実習担当教員は指導内容について、実習指導担当者以外

の訪問看護師とも連携を図る機会が多くある。これらのことから、訪問看護事業所で行われる臨地実習の実習担当教員は、実習指導担当者に限らず、事業所に属する訪問看護師とも連携を図る必要がある。しかし、実習指導担当者以外の訪問看護師との連携は、実習中に行われた指導内容の確認が主であり、実習プログラムや指導体制について考えを共有する機会は限られているのが現状である。このことから、大学と実習担当教員は実習指導に携わっている訪問看護師が臨地実習に対して抱いている思いを十分に把握できていない可能性がある。大学と実習施設との連携・協働を図るうえで、実習指導担当者等

Visiting nurses' perceptions of homecare nursing practice: a literature review

Kunimaru Shuhei, Arai Kanako

School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

2023 年 9 月 30 日受付, 2024 年 1 月 22 日受理

連絡先: 國丸 周平

滋賀県立大学人間看護学部

住 所: 彦根市八坂町 2500

電 話: 0749-28-8647

F A X: 0749-28-9515

e-mail: kunimaru.s@nurse.usp.ac.jp

の役割に限らず、実習指導に携わっている訪問看護師が抱く臨地実習に対する思いを把握することは、効果的な臨地実習を実現するために重要であるといえる。

以上のことから、これまで行われてきた訪問看護事業所での臨地実習について、実習指導に携わる訪問看護師が抱く思いを明らかにすることは、今後、訪問看護事業所で行われる臨地実習を効果的な内容にするための検討資料になると考える。よって、本研究では、訪問看護事業所で行われる臨地実習に対して実習指導に携わる訪問看護師がどのような思いを抱いているか明らかにすることを目的に文献検討を行った。

II. 用語の定義

訪問看護事業所での臨地実習に対して抱く思い：広辞苑第六版(2008)における「思い」は、「その対象について、心を働かせること」と述べられている。また、「心」は、「人間の精神作用のもとになるもの、思慮、気持」と述べられている。これらのことから「思い」は対象に対して気持を伴わせて、考えを巡らすことと解釈し、「訪問看護事業所での臨地実習について感じ、考えていること」とした。

III. 方法

1. 対象論文の選定

本研究では、実習指導に携わる国内の訪問看護師が訪問看護事業所で行われる実習に対して抱いている思いを明らかにするため、対象となる文献を国内のものに限定

した。文献を選定するにあたり、医中誌 Web、メディカルオンライン、CiNii Research の3つのデータベースを用いて検索を行った。検索は2023年9月に行い、期間の設定は行わなかった。検索語と検索式は「訪問看護師 and 実習」or「訪問看護ステーション and 実習」とし、医中誌 Web およびメディカルオンラインでは原著論文であることを絞り込み条件とした。検索により該当した文献に対して、重複論文、特集記事、文献検討、会議録、解説を除外した。それに加え、COVID-19流行下での実習に焦点を当てた研究は、これまで行われてきた平時での実習とは状況が異なることが考えられるため、本研究では除外対象とした。次に、実習指導を行う訪問看護師に関することを研究の焦点にしていることを基準に表題・抄録を読み、選定を進めた。選定された文献に対して、訪問看護師が訪問看護事業所で行われる実習に対して抱いている思いについて述べられていることを採用基準として本文を精読し、採用基準を満たすものを分析対象とした。

2. 分析方法

対象となった文献は、著者、発行年、研究デザイン、表題、研究目的、研究対象の6項目について整理した。

次に、対象となった文献の結果を読み込み、訪問看護事業所で行われる実習に対して訪問看護師が抱いている思いを示す記述をデータとして抽出した。抽出したデータは、意味内容を損なわないようコード化を行った。コードは類似性に従って分類し、抽象度を上げてサブカテゴリ、カテゴリを抽出した。サブカテゴリ、カテゴリを抽出する際は、研究者間で繰り返し検討を行い、妥当性の確保に努めた。

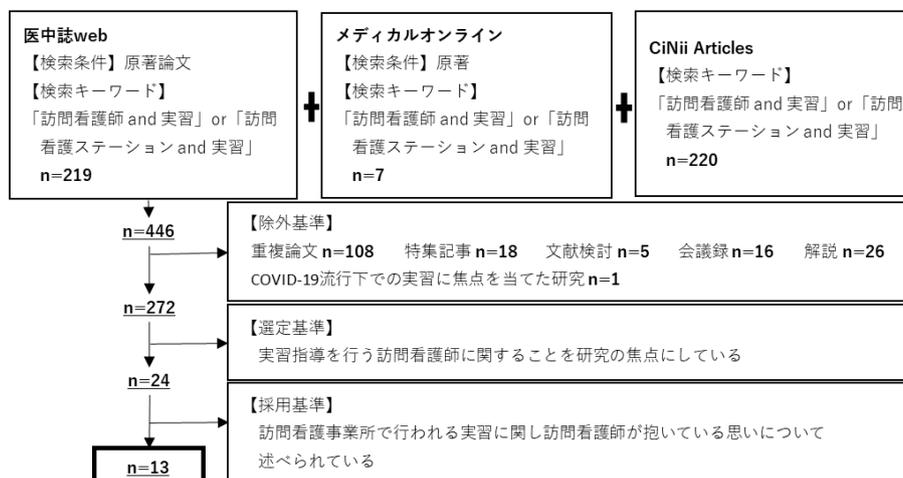


図1 文献選定プロセス

Ⅳ. 結果

検索の結果、計 446 件の文献が該当した。そこから選定を進め、13 件の文献を分析対象とした (図 1)。

1. 対象文献の概要 (表 1)

対象文献を項目別に整理した結果、出版年ごとの文献数は 2015 年が最も多く 4 件、それ以外の年は最も古い 2013 年から 2022 年まで、1～2 件だった。研究デザインについては、量的研究が 1 件、内容分析を含む質的研究が 12 件だった。研究対象は、実習指導者が 7 件の研究で対象となっており、訪問看護師が 5 件、訪問看護事業所の管理者が 3 件だった。

2. 訪問看護事業所で行われる臨地実習に対して訪問看護師が抱く思い (表 2)

訪問看護師が抱いている思いとして、55 コードから 14 サブカテゴリ、4 カテゴリを抽出した。以下、カテゴリごとに述べる。カテゴリは【】、サブカテゴリは「」。

コードは「」で示し、コード末尾 () は文献番号を指す。

1) 【実習を受け入れるうえでの困難】

このカテゴリは、訪問看護事業所での実習を受け入れることに対して、訪問看護師がさまざまな困難を抱いていることを示し、4 サブカテゴリで構成されていた。

「療養者との調整に関する困難」や「実習を運営するうえでの困難」では、学生が学ぶための学修環境を整えるうえで困難な思いを抱いていることを示している。なかには「実習目標や運営について教員と意思疎通を図ることが難しい (1)」のように、実習担当教員と連携を図ることに困難感を抱いていることが明らかとなった。また、「指導方法に対する困難」で表されている「自身の指導方法に不安を感じていることが実習指導をするうえでの困難となっている (5)」のように、訪問看護師自身の指導能力に対する不安から実習指導に対して困難な思いを抱いていることが示された。加えて、「学生の学習状況が不明瞭であることが実習指導をするうえでの困難

表 1 対象文献の概要

文献番号	著者 (発行年)	研究デザイン	表題	研究目的	研究対象
1	青柳, 照井, リトン (2022)	質的記述的研究	在宅看護論実習において訪問看護師が感じる困難と行っている工夫	訪問看護師が在宅看護論実習において感じている困難と行っている工夫を明らかにする	・訪問看護事業所の管理者 ・訪問看護師
2	後藤, 新村, 内野, 中田, (2021)	グラウンデッド・セオリーにおける継続的比較分析法	訪問看護師が、訪問看護実習教育で大切にしている看護学生への学ばせ方	訪問看護師が、訪問看護実習教育で大切にしている看護学生への学ばせ方について明らかにする	・実習指導者
3	柴田, 鈴木, 町田 (2020)	自記式質問紙調査による内容分析	訪問看護ステーションでの実習における実習指導者と教員との連携の実態と課題	訪問看護ステーションの実習指導者と教育機関の教員とがどのような連携を行いながら実習を進めているのかという実態を実習施設側の視点から明らかにする	・実習指導者
4	井上ら (2019)	質的記述的研究	初めて看護学生の訪問看護実習を受け入れた訪問看護師の実習指導前後の思い	初めて看護実習生を受け入れ、精神科訪問看護実習指導を行う前と後の訪問看護師の思いを明らかにする	・訪問看護師
5	東海林, 古瀬森鍵, 小林 (2019)	質的記述的研究	在宅看護実習で訪問看護師が感じる実習指導上の困難とその対処	在宅看護実習指導において訪問看護師の感じる困難とその対処について明らかにする	・訪問看護師
6	森本, 河野 (2018)	質的記述的研究	在宅看護学実習の学びに実習期間が与える影響 訪問看護ステーション実習における指導者の語りから	訪問看護ステーションでの実習期間が学生の学びに与える影響と、実習を効果的に運営するための要素を明らかにする	・訪問看護師
7	富樫ら (2017)	質的記述的研究	訪問看護ステーションにおける在宅看護論実習で実習指導者が学生に伝えたいこと	在宅看護論実習の実習指導者が、学生にどのようなことを伝えたいと思っているのかを明らかにする	・実習指導者
8	柏木, 川村, 原口 (2015)	質的記述的研究	看護基礎教育における在宅看護学実習の現状と課題 訪問看護ステーションへのインタビュー調査から	実習を受け入れている訪問看護ステーションが在宅看護学実習についてどのように捉えているかを明らかにする	・訪問看護事業所の管理者
9	谷田, 大元, 中川, 原田, 布施川 (2015)	フォーカス・ディスカッションによる内容分析	訪問看護師が考える学生指導 FD・FD分析	実習を受け入れている訪問看護ステーションの実習指導者が考えている学生指導について明らかにする	・実習指導者
10	牛久保ら (2015)	質的記述的研究	訪問看護ステーションにおける訪問看護実習受け入れに関する状況	実習受け入れに関係した状況を、訪問看護ステーション側から明らかにする	・訪問看護事業所の管理者 ・実習指導者
11	西村, 田村, 松村, 大西, (2015)	自記式質問紙調査による内容分析	訪問看護実習の居宅で困難と感じる内容の分析 指導者と学生のアンケート調査結果を比較して	訪問先の療養者宅において学生が感じる困難な内容、指導者が感じる学生に対しての困難な内容を明らかにする	・実習指導者
12	迫田, 岡本 (2014)	質的記述的研究	実習指導者として訪問看護師が捉えた在宅看護論実習の現状と取り組み	実習指導者として訪問看護師が捉えた実習の現状と取り組みを明らかにする	・実習指導者
13	松下, 多田, 岡久, 多田, 藤井, (2013)	量的研究	看護学生に対する訪問看護師の実習指導の現状と指導についての意識	訪問看護ステーションで行われる実習指導の現状と訪問看護師の実習指導についての意識を明らかにする	・訪問看護師

表2 訪問看護事業所での臨地実習に対して訪問看護師が抱く思い

カテゴリ	サブカテゴリ	コード(文献番号)	
実習を受けけるうえでの困難	療養者との調整に関する困難	実習での同行訪問先となる療養者の確保が難しい(1) 学生の訪問スケジュールを組むことに苦勞する(10)	
	実習を運営するうえでの困難	実習目標や運営について教員と意思疎通を図ることが難しい(1) 教員と連携をとるための時間調整が難しい(3) 学生を送迎することに苦勞する(10) 実習を受け入れるうえで、複数の教育機関に対応することが困難である(10)	
		指導方法に対する困難	訪問看護業務を全うしながら実習指導することが難しい(1) 実習で訪問看護師による指導の質を保障することが難しい(1) 学生の特徴に合わせて指導することが難しい(1) 初めて実習指導を行う訪問看護師は、実習指導に不安を抱えている(4) 自身の指導方法に不安を感じていることが実習指導をするうえでの困難となっている(5) 世代間のギャップがあることが実習指導をするうえでの困難となっている(5)
	学生に対する困難	学生の学習状況が不明瞭であることが実習指導をするうえでの困難となっている(5) 学生のコミュニケーションスキルの低さに困難を感じている(11) 学生が持つ看護技術の未熟さに困難を感じている(11) 学生が訪問マナーを身に付けていないことに困難を感じている(11) 学生の知識不足や対象の理解不足に困難を感じている(11)	
		実習指導体制に対して感じる良い点	教員との連携は、直接会う方が良いこともあると感じる(3) 実習期間が2週間あると、学生が経験できる機会が増えると感じる(6) 実習期間が2週間あると、学生は療養者の個性が理解できると感じる(6) 実習期間が2週間あると、看護展開を行い、学ぶことができると感じる(6) 実習期間が2週間あると、学生と療養者、指導者と関係がづくりができると感じる(6) 実習期間が2週間あると、段階的な指導ができると感じる(6) 実習期間が2週間あると、学生の気づきを感じるができる(6)
	実習の在り様に対する認識	実習に対して感じる課題	同行訪問において指導することは負担になると感じる(3) 同行訪問は療養者に対しても負担になると感じる(3) 初めて実習指導を行う訪問看護師は、実習指導に多くの負担感を抱いている(4) 実習目標は共通しているものの、実習内容や教員の関わりは学校により異なると感じる(8) 実習のなかで学生が看護過程を展開するには限界がある(8) 実習時間および訪問先が限られていると感じている(12) 学生が、療養者を生活者として捉えることは難しいことだと感じている(12)
		実習に対して感じる改善点	専門基礎科目を学ぶ段階で在宅での実習を導入する必要があると考える(8) 病院ベースの臨地実習から地域包括ケアを基盤とした実習に転換する必要があると考える(8) 訪問看護師養成を視野に入れた実習にする必要があると考える(8) 教員と指導体制や連携の強化を図る必要があると考える(8) 実習時間を固定せずに柔軟性を持った実習時間・スケジュールを設定する必要があると考える(8)
	学生に実習を指導したいこと	在宅療養者とその生活を捉えることを指導したい	生活を洞察する力を学生に学ばせたいと考えている(2) 学生に、療養者を生活者として捉え、人を知ること伝えたい(7) 訪問看護の対象である在宅療養者について学ばせたいと考えている(9)
		病院と在宅の違いについて指導したい	学生に、病院と施設、在宅の看護の場の違いを伝えたい(7) 病院と在宅の違いを学ばせたいと考えている(9)
		訪問看護に求められることを指導したい	学生に、サービスとして訪問看護に求められることについて伝えたい(7) 学生に、訪問看護師として求められる姿について伝えたい(7)
在宅看護において必要とされる技術について指導したい		学生に、その人らしい生活を支える訪問看護について伝えたい(7) 在宅でのケアの方法を学ばせたいと考えている(9) 家族への支援について学ばせたいと考えている(9) 在宅看護で求められる技術について学ばせたいと考えている(9) 療養者や家族との関係づくりについて学ばせたいと考えている(9)	
		多職種との連携について指導したい	学生に、多職種連携における訪問看護師の役割について伝えたい(7) 在宅看護における多職種との連携について学ばせたいと考えている(9)
看護者としての在り方について伝えたい		学生に、学習者として好ましい姿勢について伝えたい(7) 学生に、訪問看護の楽しさややりがいについて伝えたい(7)	
得られるもの		実習指導を通して自身が得られるもの	実習指導を経て達成感や満足感といった肯定的な思いを抱く(4) 指導することを通して自分の成長につながると考えている(13) 指導することで学びなおす機会となると考えている(13)

となっている(5)」に表されるように、実習に臨む学生について十分に捉えきれず、学生に対しても困難感を抱いていることが明らかとなった。

2) 【実習の在り様に対する認識】

このカテゴリでは、訪問看護事業所で行われる実習に対して肯定的に捉えつつも、難色を示すような思いがあることを示しており、3サブカテゴリで構成されていた。

《実習指導体制に対して感じる良い点》では、臨地実習が一定期間あることに対して肯定的な評価をしていることが明らかとなっている。実習指導体制について肯定的な思いを抱いている一方で、《実習に対して感じる課題》や《実習に対して感じる改善点》のように、臨地実習の在り様に課題を感じ、改善が必要と考えていることも明らかとなった。訪問看護師は課題点として「同行訪問は療養者に対しても負担になると感じる(3)」のように臨地実習によって実習指導に当たる訪問看護師だけでなく、学生の同行訪問を受け入れる療養者にも負担がかかることを懸念していた。また、「実習のなかで学生が看護過程を展開するには限界がある(8)」というように、現行の実習プログラムでは学生が取り組めることに限りがあると考えていることも明らかとなった。

3) 【実習を通して学生に指導したいこと】

このカテゴリは、訪問看護師が臨地実習を通して学生に指導したいと考えている内容について表されており、6サブカテゴリで構成されていた。

《在宅療養者とその生活を捉えることを指導したい》は、「学生に、利用者を生活者として捉え、人を知ることが伝えたい(7)」のように、療養者を生活を営む人として捉え、生活に目を向けることを指導したいと考えていることが明らかとなった。他にも《病院と在宅の違いについて指導したい》や《訪問看護に求められることを指導したい》《在宅看護において必要とされる技術について指導したい》《多職種との連携について指導したい》といった、在宅看護の特徴について指導したいという思いを抱いていた。また、それだけでなく《看護者としての在り方について伝えたい》のように、訪問看護事業所での臨地実習を通して、訪問看護師が考える療養者に関わるうえでの姿勢ややりがいについても伝えたいという思いがあることが明らかとなった。

4) 【実習を通して自身が得られるもの】

このカテゴリでは実習指導が訪問看護師自身にとって学びや達成感を得ることができる機会であるという思いを持っていることを示しており、1サブカテゴリで構成されていた。訪問看護師は「指導することを通して自分の成長につながると考えている(13)」に表されるように、実習指導が訪問看護師自身の成長や学びなおしの機会につながるといった肯定的な思いを抱いていることが明らかとなった。

V. 考 察

1. 訪問看護事業所での臨地実習に対して訪問看護師が抱く思いの特徴

本研究では、訪問看護師が抱いている思いについて4カテゴリが抽出された。訪問看護師は臨地実習を訪問看護事業所で受け入れることについて前向きな思いを抱き、看護基礎教育における実習の位置づけや実習内容といった実習の在り様に対しても課題や改善点を感じていることが明らかとなった。訪問看護師は実習の在り様に関して、課題の一つとして、療養者を生活者と捉えることは難しいと考えていた。それと同時に、臨地実習を通して指導したい内容について、療養者とその生活を捉えることを指導したいと考えていることも明らかとなった。他に、生活を支える看護や家族への支援、多職種連携について指導したいという思いを抱いていることも明らかになっている。看護基礎教育に必要な学習内容と方法に関して、看護基礎教育検討会報告書(厚生労働省, 2019)では、地域・在宅看護論は地域で生活する人々とその家族を理解し、地域におけるさまざまな場での看護の基礎を学ぶ内容とすること、臨地実習は多職種と連携・協働しながら看護を実践する実習が望ましいことが明記されている。これらのことから、訪問看護師は、臨地実習において学生が療養者を生活者として捉えることに課題を感じながらも、学生が学ぶべき項目であると捉えており、このことを含めて、訪問看護師が指導したいと考えている項目は看護基礎教育に求められる学習内容と合致しているといえる。看護学実習ガイドライン(文部科学省, 2020)では、効果的な臨地実習に必要な指導体制を構築するうえで、実習指導者は各大学の実習目的や目標を理解し、それに応じた指導を行う役割を担うと述べられている。実習指導に携わる訪問看護師は、地域・在宅看護論とその臨地実習で学ぶべき内容と合致した思いを持っていることから、実習指導者としての役割を担う素質を備えていると考えられる。そのため、訪問看護師が感じている臨地実習の課題について大学が把握し、訪問看護事業所と連携を図り、課題の達成に努めることは、臨地実習に重要な指導体制の構築へ向けた有用な足掛かりとなると考える。

訪問看護師は、臨地実習に対して肯定的に捉えながらも、多くの困難を感じていることが明らかとなった。訪問看護師は、自身の指導方法に対する不安を抱え、指導することに対して困難な思いを持っていた。訪問看護事業所での臨地実習では訪問看護師が学生を訪問看護サービスに同行させ、療養者宅へ訪問することが基本となるため、実習指導は療養者宅やその道中といった訪問看護事業所外で行われることが多い。そのため、自身や他の訪問看護師が指導している様子を確認しづらい状況があ

ることが、指導方法に対する不安につながっていると考えられる。また、訪問看護事業所は平均常勤換算従事者数が6.8人（厚生労働省，2017）と比較的小規模で人材が限られている事業所が多い。そのため、勤務中に実習指導に関する研修を受講する時間を確保することが難しいことも、自身の指導方法に対して不安を抱く原因となっていると考えられる。

また、訪問看護師は臨地実習に対して療養者との調整を図ることや実習を運営することについても困難感を抱いていた。訪問看護事業所での臨地実習は、学生が療養者宅という私的な空間に踏み入る。そのため、療養者だけでなくその家族にも同意を得る必要があるために、苦労や難しいといった困難感を抱くことにつながっていると考えられる。運営について、教員と連携を図ることも困難を感じている様子が明らかとなっている。これは、訪問看護師が訪問のために事業所を不在にすることに加え、教員が同時に複数の実習施設を並行して担当し、実習施設を巡回して指導を行う方法が基本（菊池，塚原，2022；竹口，中尾，山谷，濱田，2021）となる指導体制により、訪問看護師と教員が事業所で対面する機会が限られていることが原因であると考えられる。

以上のように、訪問看護事業所での臨地実習は訪問看護師が学生を訪問看護サービスに同行させ、療養者宅に赴き、事業所外で実習指導を行う特徴があるために、指導方法や療養者との調整、教員との連携に困難を感じていた。これらは、訪問看護師が臨地実習に対して抱いている思いの特徴的な部分であるといえる。

2. 訪問看護事業所での臨地実習を進めるうえでの課題

本研究では、訪問看護師は臨地実習を訪問看護事業所で受け入れることについて、さまざまな困難を感じていることが明らかとなった。なかには、学生に対して困難を感じているものもあり、訪問看護師が学習状況を含めた学生像を十分に掴み切れないことが原因と考えられるものもあった。訪問看護師を含む臨床看護師は、看護実践や看護の対象者に関しては日常的に関わり、学ぶ機会があるものの、学生に関わり、指導について学ぶ機会は多くない。そのため、訪問看護師が学生を捉えるためには看護基礎教育機関からの情報提供および連携が重要になると考える。教育機関から、学習状況をはじめとする学生個々の情報をはじめ、近年の学生にみられる学習に対する姿勢の傾向についても情報提供することで、訪問看護師が指導対象である学生像を掴み、学生に対する困難感の軽減につなげる必要がある。

また、訪問看護師は自身の指導方法に不安を持ち、実習目標や運営について教員と意思疎通を図ることに困難な思いを抱いていた。これらに対しては、教育機関から訪問看護事業所に対して、実習の目的・目標・求める指導内容の明確な提示と周知を行う必要がある。また、教

育機関と訪問看護事業所で臨地実習について意見を共有する場を設け、実習に対する互いの理解を深めていく必要がある。これらの取り組みを以て訪問看護師が抱く困難感の軽減に努めることが、効果的な臨地実習を実現するにあたり、看護基礎教育機関として取り組むべき課題であると考えられる。

本研究の結果では、訪問看護事業所での臨地実習に対して、訪問看護師は実習の位置づけ等の実習の在り様に対しても評価的な思いを抱いていた。これは、訪問看護師が臨地実習に関心を寄せ、訪問看護事業所での臨地実習に看護基礎教育としての意義を見出していることを示していると考えられる。このような、指導者としての姿勢を備えた訪問看護師が抱えている困難感を解消することで、看護基礎教育機関と訪問看護事業所が協働し、より効果的な臨地実習を作り上げることにつながると考えられる。

VI. 研究の限界

本研究の結果として、困難に関するコードが最も多く抽出され、訪問看護師が抱く思いの特徴は困難に表れていると考えられることが明らかとなった。これは、分析対象となった13件の文献のうち3件が訪問看護師が実習において感じている困難に焦点を絞った研究であり、分析対象の文献に偏りが生じていたことが影響していると考えられる。そのため、訪問看護師が臨地実習に対して抱く思いとその特徴については他にも潜在している可能性がある。

VII. 結論

訪問看護師が訪問看護事業所で行われる臨地実習に対して、どのような思いを抱いているか明らかにすることを目的に文献検討を行った結果、以下のことが明らかとなった。

1. 訪問看護事業所での臨地実習に関する訪問看護師の思いとして【実習を受け入れるうえでの困難】【実習の在り様に対する認識】【実習を通して学生に指導したいこと】【実習を通して自身が得られるもの】の4カテゴリを抽出した。
2. 訪問看護師が臨地実習において指導したいと考えている内容は、地域・在宅看護論とその臨地実習に求められる学習内容と合致していることが明らかとなった。
3. 訪問看護事業所での臨地実習は、訪問看護師が事業所外で実習指導を行うことが多いといった特徴か

ら、訪問看護師間で指導方法やその内容を確認しづらく、教員と対面する機会が限られているために、自身の指導方法や教員と連携を図ることに困難を抱いていた。

文 献

- ・青柳道子, 照井レナ, リトン佳織 (2022). 在宅看護論実習において訪問看護師が感じる困難と行っている工夫. 北海道公衛誌, 35 (2), 85-93.
- ・後藤雪絵, 新村直子, 内野聖子, 中田芳子 (2021). 訪問看護師が、訪問看護実習教育で大切にしている看護学生への学ばせ方. 岐阜医療科学大学紀, (15), 47-53.
- ・井上誠, 近藤美也子, 麻生浩司, 開本貴洋, 吉原由紀子, 中川惣一 (2020). 初めて看護学生の訪問看護実習を受け入れた訪問看護師の実習指導前後の思い. 日精看会誌, 62 (2), 39-43.
- ・柏木聖代, 川村佐和子, 原口道子 (2015). 看護基礎教育における在宅看護学実習の現状と課題 訪問看護ステーションへのインタビュー調査から. 日在宅看会誌, 3 (2), 44-54.
- ・菊池有紀, 塚原ゆかり (2022). みなし指定訪問看護事業所を利用する在宅看護学実習における学び. 日看教会誌, 32 (1), 103-111.
- ・厚生労働省 (2017). 訪問看護のサービス提供の在り方に関する調査研究事業 (速報値). https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000182797.pdf (最終閲覧日 2023 年 9 月 28 日)
- ・厚生労働省 (2019). 看護基礎教育検討会報告書. <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (最終閲覧日 2023 年 9 月 28 日)
- ・松下恭子, 多田敏子, 岡久玲子, 多田美由貴, 藤井智恵子 (2013). 看護学生に対する訪問看護師の実習指導の現状と指導についての意識. JNI, 12 (1), 36-43.
- ・文部科学省 (2020). 看護学実習指導ガイドライン. https://www.mext.go.jp/content/20200225-mxt_igaku-000005179_1.pdf (最終閲覧日 2023 年 9 月 28 日)
- ・森本安紀, 河野益美 (2018). 在宅看護学実習の学びに実習期間が与える影響 訪問看護ステーション実習における指導者の語りから. 人間看護学研究, (16), 57-66.
- ・新村出 (2008). 広辞苑 (6). pp.424, 東京:岩波書店.
- ・西村和子, 田村和子, 松村あゆみ, 大西貴子 (2015). 訪問看護実習の居宅で困難と感じる内容の分析 指導者と学生のアンケート調査結果を比較して. 日看会論集: 看教育, 45, 102-105.
- ・迫田智子, 岡本実千代 (2014). 実習指導者として訪問看護師が捉えた在宅看護論実習の現状と取り組み. 日看会論集: 地域看護, (44), 188-191.
- ・柴田滋子, 鈴木美和, 町田貴絵 (2020). 訪問看護ステーションでの実習における実習指導者と教員との連携の実態と課題. 日地域看護会誌, 23 (1), 52-58.
- ・東海林美幸, 森鍵祐子, 大竹まり子, 細谷たき子, 小林淳子 (2016). 訪問看護師の在宅看護実習指導における自己効力感と関連要因. 北日看会誌, 18 (2), 17-29.
- ・東海林美幸, 古瀬みどり, 森鍵祐子, 小林淳子 (2019). 在宅看護実習で訪問看護師が感じる実習指導上の困難とその対処. 日本看護研究学会雑誌, 42 (4), 819-828.
- ・竹口和江, 中尾八重子, 山谷麻由美, 濱田由香里 (2021). 在宅看護論実習の充実に向けた学生の学びの検討 学生が捉える「生活者としての療養者」の特徴. 長崎県立大学看護栄養学部紀要, 19, 11-20.
- ・谷田恵美子, 大元雅代, 中川陽子, 原田京美, 布施川雅子 (2015). 訪問看護師が考える学生指導 FD・FD 分析. インターナショナル Nursing Care Research, 14 (4), 19-28.
- ・富樫和代, 松下裕子, 田儀千代美, 田中清美, 吉野早織, 曾根美沙, 森川忍, 人見絹江 (2017). 訪問看護ステーションにおける在宅看護論実習で実習指導者が学生に伝えたいこと. 中国国立病看校紀, 12, 18-33.
- ・牛久保美津子, 飯田苗恵, 小笠原映子, 田村直子, 斎藤利恵子, 棚橋さつき (2015). 訪問看護ステーションにおける訪問看護実習受け入れに関する状況. The Kitakanto Medical Journal, 65 (1), 45-52.